
シュレッダー

金地院 憂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シュレッダー

【Nコード】
N3836P

【作者名】
金地院 憂

【あらすじ】
友人にタイトルを決めて貰ってから書きました。

「6時17分、御臨終です。」

担当医の乾いた言葉が病室に響く。

叔母さんの噉り泣く声が、顔を覆った手から漏れる。

無情にも、窓の向こうでは空が日の出を迎えていた。

部屋に差し込む朝陽と無機質なベッドとの残酷な対比が、母の死を鮮明に僕に伝える。

涙は出てこなかった。

僕は母の骨張った手を掴んだまま、もう開く事は無い母の瞼を見つめていた。

看護師がペンを走らせる音が、部屋中に広がる。

母の前では笑顔で振る舞っていた妹が、ずっと堪えていた涙を僕の背中で拭う。

医師と看護婦が部屋を出ていく。

その足音が、いつまでも僕の耳に残っていた。

僕と妹は、母親の背中を見て育った。

妹が生まれて間もなく死んだ父親の顔を、僕ははつきりとは思いつけない。

寡黙で勤勉だった父親は、唯一の趣味であった山登りから帰って来なかったのだ。

遭難届けを出した翌日に、河川の下流で父親は発見された。

僕が母の涙を見たのは、後にも先にもこの時だけだった。

印刷所を営んでいた我が家の大黒柱の代わりは、母親が十分過ぎる程に務めた。

戦後に不動産で財産を築いた祖父の援助もあり、僕達は生活には困らなかった。

現に今、僕は大学に在席しており、ましてや妹は私立高校に通っている。

農家の多い田舎町の中では、むしろ裕福な方だった。

しかし最近では母親も体調を崩し、印刷所は叔母さんの息子夫婦が継いでいた。

仕事場の雰囲気はガラッと変わり、最近では従業員も増えて、業績も右肩上がりだった。

そんな中、仕事場で唯一変わらなかったのは、父親の机の上のシュレッダーだった。

僕が生まれた日に父親が買ってきたものだ、と母は僕の誕生日の度に話していた。

その父親の形見も、去年の印刷所のリフォームに伴い、自宅の倉庫に影を潜めた。

それを思い出したかの様に、母は入院する時にうつすらと埃を被ったシュレッダーを病床に持って行った。

心電図のモニターの横に位置取るシュレッダーの違和感に、面会に来た親戚は皆、お見舞いに来たとは思えない笑顔で帰っていった。

その度に、母親は決まってこう言った。

「あんだ、シュレッダーにも切れないものがあるって、知ってたかい。」

僕はその度に適当な相槌を打ち、母の笑顔を眺めていた。

葬儀も無事に終わり、僕達は以前の生活に戻った。

ある休日に、叔母さんに頼まれ母の遺品の整理をした。

いつ着るつもりだったのか見当もつかないほど派手なワンピース。

毎年冬の始まりを告げていた緋色のカーディガン。
僕と妹が母の日にプレゼントしたエプロン。

そんな母親の生きた証の中に、あのシュレッダーを見つけた。

僕は、おもむろに蓋を開けてみた。

そこには一枚の写真が入っていた。

妹が生まれた時に撮った写真だ。

父と母の間に坊主頭の僕が立っていて、妹は母の腕の中で目を見開いている。

その裏には、インクの滲んだ文字が書かれていた。

” 家族の絆をいつまでも ”

シュレッダーでも切れないもの。

僕は何となく分かった気がした。

その日僕は、母親が死んでから初めて涙を零した。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3836p/>

シュレッダー

2010年12月9日23時29分発行